PEACE CULTURE

平和文化

2015. 11 No.190

公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation
〒730-0811 広島市中区中島町１番２号
TEL（082）241-5246（代表） FAX（082）542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成27年（2015年）11月/年３回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

被爆七十周年平和記念式典

―今年、被爆者の平均年齢は八十歳を超えました―

被爆七十年目の八月六日（木）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、被爆者や遺族など約五万五千人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。

広島市では、被爆者の高齢化等に配慮した式典運営のため、昨年度から平和記念公園の中央参道石張舗装改良を進め、今回の式典から全参列席にテントが設置されました。

式典は午前八時に始まり、最初に松井一實広島市長と遺族代表二人が、この一年間に亡くなられたことが確認された五千三百五十九人の氏名が記帳された二冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は二十九万七千六百八十四人、名簿総数は百九冊となりました。

平和宣言を行う松井市長

続いて永田雅紀広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に、遺族代表の仲川弘美さんと、こども代表の東川悠輝さんが平和の鐘をつき、参列者全員が一分間の黙祷を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。宣言の中で市長は、一九四五年八月六日八時十五分に広島に投下された一発の原子爆弾により、その年の暮れまでに十四万ものかげがえのない命が奪われたこと、その中には朝鮮半島、中国、東南アジアの人々や米軍の捕虜も含まれていたこと、また、辛うじて生き延びた人々も、被爆による深刻な心身の後遺症や差別・偏見に苦しめられてきたことを紹介しました。

また、世界には、いまだに一万五千発を超える核兵器が存在し、それが意図的および偶発的に使用されるリスクが高まっていることを指摘し、「核兵器が存在する限り、いつ誰が被爆者になるか分かりません。ひと

目　次

被爆70周年平和記念式典 …… 1～2
国際平和シンポジウム …… 2
賢人グループ会合・国連軍縮会議 …… 3
「ヒロシマが昔話にならないように」（本財団被爆体験証言者　山本玲子） …… 4
被爆体験記集Ⅰ「しまってはいけない記憶」／
被爆70周年 広島平和記念資料館 収蔵資料展 …… 5
第23回世界スカウトジャンボリーにおいて朗読会を開催／
こども平和キャンプ／被爆体験の継承にご協力を …… 6
ピースナイター2015／平成27年度ひろしま子ども平和の集い／
長崎原爆犠牲者慰霊の会 …… 7
ヒロシマ・ピースフォーラム／英語で伝えようヒロシマセミナー／
広島・長崎講座現地学習支援―セントラルコネチカット州立大学 …… 8
米国でのヒロシマ・ナガサキ原爆展／国内5都市で原爆展を開催 …… 9
米国の日本研究会がワークショップを実施／広島平和学習セミナー（郡山） …… 10
高校生による「原爆の絵」が完成／
広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告第11号 …… 11
資料展「電車　走る」／ネパール地震被災者救援市民募金（ご報告）／
JICAサロン「余熱の会　南米チリ」／
広島市外国人市民の生活相談コーナーをご利用下さい …… 12
姉妹・友好都市を市民に紹介／ひろしま奨学金決定書交付式 …… 13
「被爆70年:2015年NPT再検討会議―市民の取組と今後の展望―」
（広島県生活協同組合連合会　高田公喜） …… 14
海外からの来訪者が発信するメッセージ／書籍の紹介「軍縮辞典」 …… 15
“ヒロシマの心”を発信する人々「『平和の鐘』響け再び実行委員会」 …… 16

インターネットでは、本財団ホームページ（上記ＵＲＬ）から、カラー写真掲載のウェブ版機関誌がご覧になれます。

たび発生した被害は国境を越え無差別に広がります。世界中の皆さん、被爆者の言葉とヒロシマの心をしっかり受け止め、自らの問題として真剣に考えてください。」と訴えました。

そして、オバマ大統領をはじめとする各国の為政者に、被爆地を訪れて、被爆者の思いを直接聞き、被爆の実相に触れるよう求め、日本政府には、核保有国と非核保有国の橋渡し役として核兵器禁止条約を含む法的枠組みの議論の開始を主導することや、高齢となった被爆者への支援策、「黒い雨降雨地域」の拡大を求めました。

平和宣言の後、こども代表の桑原悠露君と細川友花さんが、昨年八月二十日に広島市で発生した豪雨災害で大切な仲間の一人を失った経験や、祖父母たちが七十年間ヒロシマを生き抜いて自分たちにつないでくれた命に思いをはせ、「広島に育つ私たちは、事実を、被爆者の思いや願いを、過去　現在　未来へと、私たちの平和への思いとともにつないでいく一人となることを誓います。」と、「平和への誓い」を読み上げました。

この後「あいさつ」の中で、安倍晋三内閣総理大臣は、広島で、被爆七十年という節目の年に包括的核実験禁止条約（CTBT）賢人グループ会合、第二十五回国連軍縮会議が開かれ、さらに来年、G7（先進七か国）外相会合が開かれることを挙げ、世界の指導者や若者が被爆の悲惨な現実に直に触れることを通じ、「核兵器のない世界」の実現に向けた取組をさらに前に進めていくと述べました。

そして、被爆者の平均年齢が八十歳を越える現在、特に原爆症の認定については、申請者の心情を思い、一日も早く認定がなされるよう、審査を急ぐ考えを示しました。

式典には四十一都道府県の遺族代表、在外被爆者と在外遺族代表、湯崎英彦広島県知事の他、司法機関の長である寺田逸郎最高裁判所長官、ラッシーナ・ゼルボ包括的核実験禁止条約機関（CTBTO）準備委員会暫定技術事務局長、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む過去最多の百か国と欧州連合（EU）の大使や代表が参列しました。また、平和首長会議リーダー都市及び広島市の姉妹・友好都市から青少年代表も参列しました。

式典の様子はインターネットでライブ中継されました。動画は、ひろしまムービーチャンネル（http://www.city.hiroshima.lg.jp/movie/）の「原爆・平和」から視聴できます。式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページ（http://www.city.hiroshima.lg.jp/）の「原爆・平和」→「平和宣言・平和への誓い・平和に関する要請等」から閲覧できます。「平和宣言」は九言語（英語、アラビア語、中国語、フランス語、ドイツ語、ハングル、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語）の外国語版も閲覧できます。

（総務課）

国際平和シンポジウムの開催

七月二十五日（土）、本財団と広島市、朝日新聞社の共催により、「核兵器廃絶への道～被爆七十周年：核兵器の非人道性を見つめ、非合法化へ～」をテーマに、国際平和シンポジウムを広島国際会議場で開催しました。

最初に、広島女学院高等学校音楽部が、なかにし礼さんが作曲した核兵器に反対する歌、「リメンバー」を合唱しました。続いて、本財団被爆体験証言者の山本定男さんが、ご自身の被爆体験や、今年五月に本財団が米国・ワシントンDCで開催した「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」での講演の様子等を話しました。

特別講演では、広島出身の元陸上選手、為末大氏が講演を行い、平和を維持するためには、体験の共有や自分自身を知ること、世代を超えた対話が重要であると述べました。

基調講演では、一九九六年、国際司法裁判所が、「核兵器は一般的に人道法違反」という勧告的意見を出した当時の裁判長、モハメド・ベジャウィ氏が登壇し、当時、平岡敬広島市長と伊藤一長長崎市長が同裁判所で意見陳述したことにも触れ、この勧告的意見に至った経緯を説明しました。その上で、核兵器廃絶に向けては国際世論の高まりが重要であり、一人一人が声を上げることが不可欠であると訴えました。

パネルディスカッションでは、ベジャウィ氏のほか、小溝泰義本財団理事長、作家でジャーナリストのマックス・マッコイ氏、東京工業大学教授の池上雅子氏が、核兵器を非合法化し、廃絶につなげる方策等について議論しました。小溝理事長は、核兵器の抑止力に依存しない安全保障体制を構築することが重要であるとして、市民社会レベルでの幅広い交流と相互理解促進の必要性を訴えました。

パネルディスカッションでの小溝理事長

（平和連帯推進課）

賢人グループ会合・国連軍縮会議の開催

賢人グループ会合

被爆七十周年の今年、八月二十四日（月）、二十五日（火）にCTBT（包括的核実験禁止条約）の発効を促進するために、ウィリアム・ペリー元米国国防長官やデス・ブラウン元英国国防大臣など政治的地位の経験を有する著名人や国際的に認められた専門家により構成される「賢人グループ会合」が、日本で初めて広島市で開催されました。

松井市長は、オープニングセッションにおいて、「会議では積極的かつ前向きな議論が行われ、この広島の地から『核兵器のない世界』に向けた力強いメッセージが発信されることを大いに期待します。」と述べました。

また、被爆者の体験や平和への思いを共有してもらうため、広島市の提案により、会合のプログラムに広島平和記念資料館の見学、被爆体験証言の聴講等、被爆の実相を伝えるプログラムが組み込まれました。このプログラム終了後、会議参加者からは、「我々は皆、核兵器が決して二度と使用されないように尽力していかなければならない」などの発言があり、核兵器廃絶に向けて取り組む決意を新たにする機会となりました。

会合では、米国や中国などの条約未批准八か国に対し、緊急に条約の批准を求める「広島宣言」が採択されました。

小倉さんの被爆体験証言を聴講する賢人グループ会合メンバーたち

国連軍縮会議

賢人グループ会合に引き続き、八月二十六日（水）から二十八日（金）にかけて「第二十五回国連軍縮会議ｉｎ広島」が開催され、二十三か国・五国際機関から八十三人が会議に参加しました。

国連軍縮会議は、アジア・太平洋地域において軍縮問題に対する意識を高め、軍縮・安全保障に関する対話を行うことを目的として、国連が平成元年（一九八九年）から開催しており、広島市では十九年ぶり四回目の開催となりました。

今回の会議では、広島市からの提案により、被爆の実相を伝えるプログラムや、賢人グループ会合のメンバーが参加するオープニングハイレベルセッション、国内外の若者が平和について発表し合う世界学生平和会議が会議プログラムに組み込まれました。

オープニングハイレベルセッション

初日の八月二十六日の午前に、『核兵器のない世界』の実現に向けて～被爆地からのメッセージ」をテーマに一橋大学の秋山信将教授の進行により、元為政者、被爆者、広島市長、広島県知事等が参加し、オープニングハイレベルセッションが行われました。

広島県原爆被害者団体協議会の坪井直理事長が「原爆の放射線による苦しみは死ぬまで続くが、最後の一呼吸まで核兵器廃絶を諦めない。」と訴えるなど、「核兵器のない世界」の実現に向けて活発な議論が交わされました。

オープニングハイレベルセッションの様子

被爆の実相を伝えるプログラム

八月二十六日の午後、会議参加者は、被爆の実相に触れ被爆者の体験や平和への思いを共有するプログラムとして、平和記念公園を訪問しました。原爆死没者慰霊碑への参拝・献花の後、志賀賢治館長の案内で平和記念資料館を見学し、続いて、被爆者の梶本淑子さんによる被爆体験証言を聴講しました。

梶本さんは、「核兵器と人類は共存できません。二度と戦争をせず、核兵器を廃絶してください。」と訴えました。

発言する松井市長

世界学生平和会議

次代を担う学生が、被爆地広島において核兵器廃絶や平和問題に係る発表や意見交換を行うことにより、国際感覚を高め、国際社会で活躍し得る人材へと成長する契機とするため、世界学生平和会議を開催しました。

会議の中で、学生から、「私たちの小さな一歩も重要なステップです。世界をより良くするため、活動を続けていきたいと思います。」など、力強い発表が行われました。

五日間にわたる一連の行事を通じて、被爆地広島を訪れることは平和への思いを共有する良い機会であると改めて確認でき、また、二〇二〇年までの核兵器廃絶を願うメッセージを国内外に広く発信することができました。

（平和連帯推進課）

被爆体験記

ヒロシマが昔話にならないように

本財団被爆体験証言者
山本　玲子

プロフィール
〔やまもと　れいこ〕
1938年（昭和13年）生まれ。
1年生だった7歳の時、爆心地から4.1km離れた国民学校の校庭で、飛行機を見上げていた時に被爆。戦後は損害保険会社勤務を経て、子育てに専念。1980年から児童館に非常勤職員として勤務。2005年よりヒロシマ ピース ボランティアとして活動。

校庭で被爆

昭和二十年、私の通学していた国民学校は広島市に隣接していましたが、郡部でしたので、集団疎開はありませんでした。夏休みは八月十日頃からの予定でした。

八月六日は月曜日で、暑い朝でした。私は学校につくと、教室にカバンをおいて校庭に遊びに出ました。

「飛行機だ!!」「B29だ!!」とのさわぎ声に空を見上げると、二機の飛行機が朝日に銀色に輝いて、上下に動いています。

「ああ、きれい!!」と思った瞬間、ピカッと光り、〝太陽が落ちた〟と思いました。

校庭は、まきあがる土煙で黄土色になり、夕暮れのように暗くなりました。逃げ惑う児童は、ぶつかって倒れたりしています。私も友達といっしょに逃げました。

だんだん明るくなってきて、周囲が見えるようになると、私は裏門から出て、近くの民家の縁側の下にうずくまっていました。まわりには十人くらいの上級生がいました。

上級生が校庭に戻っていったので、後をついて戻りました。校舎は二階建てのまま建っていましたが、瓦は落ちて、窓もガラスも飛び散っていました。教室に入ろうとしましたが、廊下の天井が落ちていて入れなかったので、家に帰りました。

自宅は、二階の一部がねじれ、雨戸や障子も吹きとび、タンスや戸棚も倒れていました。中に入れないので、妹と縁側で遊んでいると、空が暗くなり雨が降り出しました。猫のタマがのっそりと庭に出て行きました。収穫した米や麦をネズミが荒らすので、家ではネズミ退治に猫を飼っていたのです。タマは白と黒のブチ模様でしたが、雨にうたれると白い毛が黒くなりました。黒い雨なんてめずらしいので、私も外に出て両手で雨を受けました。ねっとりとした不思議な黒い雨でした。

おじさんのやけど

下着姿の知り合いのおじさんが、布団を一枚かついで庭に入って来て、「水、水をくれ!!」と縁側に倒れ込みました。ひどいやけどで、もう自分では動くことも出来ません。

祖母と母が二人がかりで布団に寝かせ、水を飲ませると、黄色い水みたいなものを吐きます。垂れさがった腕の服を母がハサミで切り取ると、それは服だけではなく、肩や首、腕のやけどの皮膚もいっしょにくっついたものでした。やけどに油をぬりましたが、足りないので、胡瓜をすりおろして貼り付けました。いつのまにか傷に無数のハエがたかりました。

おじさんは熱が高く、八月七日の昼過ぎに亡くなりました。

「黒い雨の染みが残る体操シャツ」
松宮豊子氏寄贈／広島平和記念資料館所蔵
西高等女学校専攻科だった久保田豊子さん（当時16歳）は、学校の校舎2階で被爆した。このシャツは被爆時に着ていたもので、避難するときに浴びた黒い雨の染みが残っている。

みんなの力で平和を

戦後は食料難で苦しい生活でした。家は農家だったので、粗末なものでも食べる物はありましたが、家を焼かれ何も無くなった親類もいっしょに暮らしたので、大人数での生活は大変でした。

秋には田んぼでイナゴを取るのが日課でした。イナゴを網でとり、一升瓶にいれ、一日おいて汚物を吐かせ、焼いたり乾煎りしたりして食べました。お弁当が必要な日も、みんな昼には家に食べに帰っていました。芋粥や、すいとん汁が主食だったので、お弁当にして持っていけなかったのです。

戦後十年過ぎた頃から、白血病などで亡くなる人が多くなりました。集団疎開がなかった国民学校の一、二年生は、病気になったり、身体の調子が悪く、自殺した級友もいました。

戦争は人間が始めるものです。人類と地球を守っていくためには、戦争をしてはいけませんし、核兵器を絶対に使用してはいけません。核の無い、平和が続くように、みんなの力で守っていけたらと願います。

被爆体験記集Ⅰ「しまってはいけない記憶」を発行しました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆体験記を残す意欲がありながら、高齢等により執筆が困難な広島県内の被爆者を対象に、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の職員が聴き取りと代筆を行い、被爆体験記の執筆を補助する事業を行ってきました。平成十八年から現在までに百三編の被爆体験記を完成しています。

執筆補助事業は職員が二人一組で被爆者の方に聞き取りを行います。七十年前の記憶を呼び起こしていただき、できるだけ詳しく正確な体験記を残していただくために、こちらで質問を用意し、それにお答えいただく形で聞き取りを進めています。

(一)「証言者ご自身について」―被爆時の年齢や職業（学校）、住所や家族構成等。

(二)「被爆前の生活状況」―比較的苦労はなかったとおっしゃる方も八月六日当日は勤労奉仕に従事していたりと、戦時の生活が垣間見えます。

(三)「被爆時の状況」―被爆場所とその時、何をされていたか。また、原爆が投下された瞬間の音、光、色、臭い、感触などを細かに聞きます。光がどの方角に見えたか、といったことも詳しく聞き取ります。その後、どの方角に逃げたか、救助を受けた場所、家族の捜索、広島市内の被爆の現状・・・この部分が最も長く濃い内容になります。

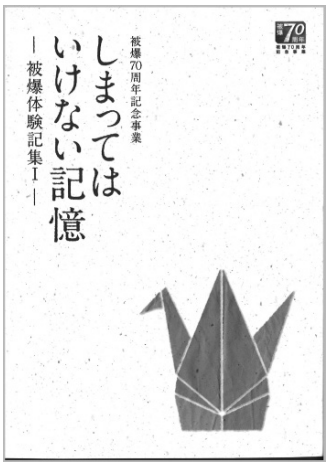
そして、私どもの執筆する被爆体験記のひとつの特徴として、

(四)「被爆後の生活状況」にも多く文章をさきます。生活のご苦労や被爆の後障害についてお聞きすると、やはり病気に苦しんだ人が多いことを改めて認識させられます。今は、多くの方々が、お子さん、お孫さん、曾孫さんに恵まれ、平穏な日々を過ごしていらっしゃいますが、振り返るとなお一層、被爆とその傷痕の尋常ならざることを思います。現時点でできうる限りの正確な記述がなされた被爆体験記に仕上げることができたと思っています。

被爆七十周年を迎えた今夏、完成した被爆体験記を書籍として発行しました。今年度発行分では、約半数の五十編を収録しています。A5版、五五七頁、広島市が取り組んでいる折り鶴再生モデル事業で作られた折り鶴再生紙を使いました。

六百部発行し、学校と公共施設に配布しました。主な配布先は、広島市内全中学校・高等学校、広島市内全図書館及び広島県内主要図書館、広島県内全大学図書館です。一般の方には配布していませんが、書籍に掲載されている被爆体験記全編を「平和情報ネットワーク」（http://www.global-peace.go.jp/）で公開していますのでご覧ください。

（原爆死没者追悼平和祈念館）



「被爆体験記集Ⅰ　しまってはいけない記憶」

「被爆七十周年 広島平和記念資料館 収蔵資料展」を開催しています

広島が原子爆弾による被害を受けた一九四五年（昭和二十年）から七十年が経ちました。被爆から十年後、一九五五年（昭和三十年）に開館した広島平和記念資料館は、所蔵する様々な資料を通じて、被爆による人々の苦しみや悲しみを世界に伝え、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を訴え続けてきました。

被爆七十周年という節目の年である今年は、資料館のリニューアル工事が行われていることもあり、被爆建物である旧日本銀行広島支店において、資料館の収蔵資料を展示しています。

同建物地下の三室において、市民が描いた原爆の絵を「廣島が消えた日」、変形したガラスびんなどの被爆資料を「熱と炎のつめ跡」、資料館が新たに収集した原爆被災写真を「廃虚に生きる」と題して展示しています。

この収蔵資料展が、原爆がもたらした被害について一層の理解と、平和の尊さについて改めて考えていただく契機となれば幸いです。

展示場所
旧日本銀行広島支店地下一階
広島市中区袋町五番二一号

展示期間
平成二十七年七月一五日（水）～概ね一年間

展示資料
市民が描いた原爆の絵（複製）四十点、被爆資料 二十六点、新収集写真　三十八点

【お問い合わせ】
平和記念資料館　学芸課
☎（082）241・4004

王冠のかたまり（被爆資料）

第二十三回世界スカウトジャンボリーにおいて朗読会を開催しました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、体験記や原爆詩を読み語ることによって、幅広い人々と被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へと継承することを目的に、平成十七年の春から「被爆体験記朗読会」を開催しています。

四年に一度のスカウトの国際大会、第二十三回世界スカウトジャンボリーが山口市阿知須のきらら浜を主会場に開催され、世界百五十五の国と地域から十四～十七歳の少年少女たち約三万四千人が集いました。被爆七十年を迎える広島市を参加者が訪れる広島ピースプログラムの一つとして英語による朗読会を開催し、七月三十日から八月五日（八月二日を除く）までの期間中に計二十四回、約二万六千人が参加しました。

朗読会では、原爆被害の概要を映像で紹介した後、朗読ボランティアによる被爆体験記・原爆詩の朗読を行い、最後に参加者全員で原爆詩を朗読しました。情景を思い描きながら朗読を聴き、また自ら声を出して読むことにより、被爆体験が臨場感を持って伝わります。最後に、メッセージとして、参加者の意見発表がありました。「原爆がこんなに破壊的なものだとは思っていませんでした。もし、原爆の使用を認めるべきだと言う人がいるのなら、ここに来て原爆が引き起こした悲劇を見るべきだと思いました。」など、毎回多くの参加者の発表がありました。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

原爆詩の朗読の様子

こども平和キャンプ～仲間と平和を考える～

本財団では今年も夏休み期間中の八月二日から四日までの二泊三日間で小・中学生向けの平和キャンプを開催しました。

以前の「ピース・サマースクール」、「キッズ平和スクール」から数えて通算二十二回目となります。

このキャンプは広島市三滝少年自然の家と広島市似島臨海少年自然の家との共催で、対象は小学四年生から中学三年生です。今年は小学生三十五人、中学生十人、十八歳以上のボランティア十人の計五十五人が参加しました。

初日、参加者は現在の平和記念公園のある中島地区が、被爆前には繁華街だった様子を紹介したDVDを鑑賞しました。その後、六班に分かれて公園内の慰霊碑等をヒロシマピースボランティアの解説を聞きながら巡り、中島地区の繁栄―壊滅―公園化の歴史の変遷を学びました。

夕方は三滝少年自然の家に移動し、楽しいゲームで盛り上がった後、「ピースキャンドルのつどい」で学年を越えた仲間の絆を強めました。

二日目は宇品の広島港からフェリーに乗って似島臨海少年自然の家に移動し、海水プールで思い切り泳ぎました。

夕方、今は穏やかな似島が、かつて戦争と原爆に翻弄された過去を詳しく学びました。参加者は、夕暮れに静かに佇む遺構を巡りながら、平和の大切さをかみしめました。

夜は皆で協力して賑やかにバウムクーヘンを作っておいしく食べました。

最終日は各班で三日間の活動をまとめて発表しました。「友達とけんかしない、したら謝る、けんかを止める」、「当たり前の生活を維持できるのが平和」、「平和のためには知ることと伝えることが大事」といった発表があり、次世代を担う小・中学生が平和について考える機会となりました。

（平和記念資料館　啓発課）

班ごとに発表する参加者

被爆体験の継承にご協力を

―被爆資料、原爆死没者の氏名・遺影、被爆体験記募集―

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様のご協力をお願いします。

●被爆資料―被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接物語る実物資料。

●氏名・遺影―原爆死没者の氏名・遺影（氏名のみの登録も可能）。

●被爆体験記―被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

【お問い合わせ】

■被爆資料について
広島平和記念資料館　学芸課
☎（082）241・4004

■氏名・遺影、体験記について
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
☎（082）543・6271

「ピースナイター二〇一五」の開催

八月五日（水）、生協ひろしま等との共催により、カープ応援の場を活用して核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを発信する「ピースナイター二〇一五」をマツダスタジアムで開催しました。

具体的には、

①大型ビジョンで松井市長や湯崎県知事等の平和を願うメッセージを放映しました。

②プリマバレリーナで広島市名誉市民の森下洋子氏が始球式を行いました。

③カープの監督、選手等がピースワッペンを着けてプレーしました。

④五回裏終了時に、原爆ドームと同じ高さに赤色の線「ピースライン25」を作り、平和への願いをアピールしました。

また、グラウンドでは、森下氏の平和メッセージに合わせて、地元高校生等による「ピースパフォーマンス」を行いました。

緑色と赤色のピースポスターを用いて原爆ドームと同じ高さに「ピースライン25」を作る観戦客

今年で八回目の開催となり、五回裏のピースポスターを用いたアピール活動に約三万人の観客が参加し、多くの方が核兵器廃絶及び世界恒久平和について考える日となりました。

（平和連帯推進課）

「平成二十七年度ひろしま子ども平和の集い」の開催

八月六日（木）、広島市、広島市教育委員会との共催により、若い世代の平和意識の高揚と主体的な取組の促進を図るため、平和記念式典参列等のために広島を訪れる子どもたちと広島の子どもたちに対し、平和のメッセージを発信する機会を提供する「平成二十七年度ひろしま子ども平和の集い」を広島国際会議場で開催しました。

被爆七十周年の節目の年である今年、特別プログラムとして、ひろしま平和大使で現在アメリカ在住の田村秀子さんに、平和メッセージを発表していただきました。

その後、広島県内外から参加した九団体の児童・生徒が、言葉や音楽、書道、紙芝居など、様々な表現方法で平和への思いを発表しました。

メッセージの発表を行った児童・生徒の多くが平和記念式典にも参列しており、すべての発表において、平和な世界の実現に向けた子どもたちの熱意と高い意識が感じられました。

最後に、発表した全ての団体に、広島市教育長が、「アオギリ賞」、「キョウチクトウ賞」、「折り鶴賞」として、表彰状と記念の楯を贈呈しました。

会場は、開会から閉会まで多くの来場者でにぎわいました。

（平和連帯推進課）

合唱する広島市立神崎小学校の生徒たち

長崎原爆犠牲者慰霊の会

本財団では、長崎に原爆が投下された八月九日に、同じ被爆地である広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにするため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

平和記念資料館東館地下一階ホワイエで開催した今年の慰霊の会には、被爆者や国内外からの来館者など約六十人が参加しました。

まず、小溝泰義本財団理事長の挨拶で開会し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴しました。原爆投下時刻の午前十一時二分には、全員で一分間の黙とうを捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会の坪井直理事長からご挨拶をいただき、最後に、長崎の被爆者証言ビデオ（証言者・吉田一人さん）を視聴して閉会しました。

（平和連帯推進課）

挨拶する小溝理事長

ヒロシマ・ピースフォーラム

本財団では、広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動していけばよいかを探求する機会を提供するため、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。昨年度に続き、広島市立大学の講座「広島からの平和学」と連携して、五月から七月までの間に全六回開催し、同大学の学生を含む十代から七十代までの約八十人が参加しました。

フォーラムでは、被爆体験証言の聴講や、医療、市民社会、国際協力など多角的な面から原爆や平和について考える講座を用意するとともに、グループ討議と最終回での発表により、参加者自身で考え、活発な意見交換ができる内容としました。第三回目は現地学習として似島（にのしま）に渡り、似島の歴史を学習し、遺構巡りをしました。

参加者のアンケートでは、「様々な人の意見を聞くことができて良かった」といった感想が寄せられ、ほとんどの方に「原爆被害や平和に関して理解を深めることができた」と回答していただきました。

（平和連帯推進課）

似島遺構巡りの様子

英語で伝えよう ヒロシマセミナーの実施

広島平和記念資料館では、原爆被害に関する基礎知識を英語で伝える方法について学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を実施しています。

平成二十七年五月二十四日（日）と七月十九日（日）に実施した「一般の部」には、海外渡航の予定や、ホームステイなどで外国人を受け入れる機会のある人、また日頃、英語で原爆被害についてどのように伝えたら良いかを学習したい人など、計百五人が参加しました。

両日とも二部構成で実施し、前半部分では、米国出身の英語教員クレイグ・ネヴィットさんが、原爆被害の概要について英語で説明した後、外国人から寄せられる質問に英語で簡潔に答える方法を説明しました。

後半部分では、第一回は、被爆の実相と広島をアピールする質疑応答を考えるグループワークを行い、第二回では、平和活動家のスティーブン・リーパーさんが、NPT再検討会議終了後の今後の核兵器をめぐる世界の状況について講演しました。

また、五月から七月にかけて、留学予定の高校生を対象に同セミナーの「高校生の部」を五回実施し、計百一人の生徒に、英語での原爆被害の概要を説明しました。

被爆の実相や、広島についての質疑応答を考える参加者にアドバイスをする講師のネビット氏

セミナーの参加者からは「知っていたようで実は知らなかった事実があった」「海外渡航前に英語でプレゼンする練習ができて、よかった」といった感想が寄せられました。

（平和記念資料館　啓発課）

広島・長崎講座現地学習支援
―セントラルコネティカット州立大学―

広島市と長崎市は、被爆者のメッセージを人類共通の財産として学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、国内外の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

六月六日・七日、同講座を開設している米国・セントラルコネティカット州立大学の学生十四人・教員二人が広島で現地学習を行いました。

今回の現地学習では、平和記念公園や平和記念資料館の見学、小倉桂子（おぐらけいこ）さんによる被爆体験証言の聴講、原爆死没者追悼平和祈念館での原爆詩朗読会への参加等を通して被爆の実相を学んだほか、広島経済大学の学生との交流も行いました。

また、被爆二世である引率の友田（ともだ）教授のお母様の遺影が今回追悼平和祈念館に登録されたこと等を通して、学生たちは被爆とその記憶の継承について身近に感じていました。

（平和連帯推進課）

引率の友田教授のお母様の遺影を通し、被爆について身近に学ぶ

小倉桂子さんの被爆体験証言を聴講したセントラルコネティカット州立大学の一行

米国でのヒロシマ・ナガサキ原爆展の開催

被爆七十周年を迎える今年、核超大国である米国の首都ワシントンDCにおいて六月十三日から八月十六日まで、また、マサチューセッツ州ボストン市において九月十一日から十月十八日まで、それぞれ「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。

ワシントンDCのアメリカン大学にあるカッツェンアートセンター内のアメリカン大学美術館では、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネルや、動員学徒として作業中に被爆し、犠牲となった中学生の制服や焼けた水筒などの遺品を始め、被爆資料二十五点が、隣接した会場では、丸木俊・位里夫妻の「原爆の図」六点と、戦後すぐにワシントンDCの教会から届いた文具を使って広島市の本川小学校の児童が書いた絵等が展示され、来場者が熱心に見学していました。

六月十三日には開会式が行われ、今回の原爆展開催に尽力された、アメリカン大学のピーター・カズニック教授が開会に至る経緯などを説明したのち、広島平和記念資料館の志賀館長が原爆展開会の謝辞を述べ、在米国日本大使館の大鷹正人公使が挨拶をされました。その後、広島で被爆した山本定男さんが、地図や絵などで構成されたスライド資料を効果的に使用して被爆体験証言を行った後、長崎で被爆した深堀好敏さんが今回の展示パネルに使用している写真について説明を行いました。来場者は皆熱心に被爆証言や写真の説明に聞き入っており、終了後には、「わざわざ米国まで来て証言などをしてくれて非常に感謝している」との感想を伝える人もいました。

また、六月十四日には、志賀館長の案内で米国内務省国立公園局長一行等が原爆展を見学し、熱心にパネルや被爆資料に見入っていました。見学後、同局長から「非常に心が痛む内容で、力強い展示であった」との発言がありました。

アメリカン大学での開会式での被爆体験証言の様子

アメリカン大学美術館での展示終了後、ボストン大学アートギャラリーでも、広島・長崎の被爆の実相をパネルと被爆資料で伝える展示を行い、核兵器が使われるとどのようなことが起こるのかを、来場者の方々に伝えました。

（平和記念資料館　啓発課）

国内五都市で原爆展を開催しました

広島平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国内世論を醸成するため、平成八年度から国内各地の都市と原爆展を共催しています。

本年度は秋田県秋田市、新潟県の上越市、新発田市、鹿児島県鹿児島市、愛媛県松山市の五都市で開催し、五都市合わせて、一万四千八百人以上の来場者がありました。

各展示会場では、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネルや被爆資料のほか、市民が描いた原爆の絵の展示等を行いました。また、秋田市では川本省三さんが、上越市では寺本貴司さんが、新発田市では瀬越睦彦さんが、鹿児島市では笠岡貞江さんが、松山市では白石多美子さんがそれぞれ被爆体験講話を行いました。どの都市でも多くの人々が来場し、被爆体験証言者の言葉に熱心に耳を傾けていました。

来場者からは、「これからの子ども達への強い思いを感じました」（秋田市）や「広島に行く機会がないので、原爆展を見たことは貴重な経験になった。信じられない写真ばかりだったが、日本人として知らなくてはいけない」（上越市）、などの感想が寄せられました。

実施の概要

【秋田市】
期間：七月四日（金）～七月十二日（日）（九日間）
場所：秋田市にぎわい交流館AU
来場者数：二千九百七十八人

【上越市】
期間：七月十七日（金）～二十五日（土）（九日間）
場所：小川未明文学館
来場者数：二千八百七十二人

【新発田市】
期間：七月二十八日（火）～八月二日（日）（六日間）
場所：新発田市生涯学習センター
来場者数：千三百三十六人

【鹿児島市】
期間：八月七日（金）～八月十二日（水）（六日間）
場所：鹿児島市中央公民館
来場者数：二千五百九十一人

【松山市】
期間：十月十五日（木）～十月二十二日（木）（七日間）
場所：松山市総合コミュニティセンター
来場者数：五千百四人

（平和記念資料館　啓発課）

被爆体験講話の様子（秋田市）

日本研究協会がワークショップ「広島・長崎を記憶する：1945-2015」を実施

様々な分野の日本研究家が参加し「日本学」の普及に努めている米国の日本研究協会（Japan Studies Association）が、六月二十八日から七月五日まで広島・長崎両市において、被爆七十周年を記念して、「広島・長崎を記憶する：1945-2015」と題するワークショップを開催しました。

ワークショップは、様々な角度からヒロシマ・ナガサキについて学び・議論する内容で、米国の若手大学教員三十二人と、フィラデルフィア・コミュニティ・カレッジの教員及び学生十四人の、計四十六人が参加しました。

また、広島平和文化センター理事長及び広島市立大学広島平和研究所所長が名誉共同議長を務めました。

六月二十九日・三十日の二日間は、主に広島国際会議場の研修室を会場として、本財団の小溝理事長による「核兵器のない平和な世界を目指して―広島平和文化センターと平和首長会議の役割」と題した講演や、小倉桂子さんによる被爆体験証言、広島平和記念資料館の志賀館長による「記憶の継承」と題した講演が行われたほか、平和研究所の吉川所長、水本副所長、ジェイコブズ准教授による講義や、原爆文学に関するディスカッション等が行われました。

小溝理事長が本財団と平和首長会議の役割について講演

志賀館長が平和記念資料館の歴史等について講演

更に、参加者は平和記念公園や広島平和記念資料館、放射線影響研究所等を見学しました。

なお、同協会は、二〇〇三年にも、本財団及び平和研究所の協力により四日間の会議を広島で開催しています。

（平和連帯推進課）

広島平和学習セミナー（郡山）を開催しました

日　時―平成27年7月23日
場　所―ビッグパレットふくしま
参加者―学校関係者、教育委員会、旅行会社

広島での平和学習プログラムを全国に紹介することにより、二十一世紀を生きる子どもたちが、一人でも多く広島を訪れ、ヒロシマを知り、平和の大切さを学ぶことができるよう、学校関係者や旅行会社などを対象として、広島平和学習セミナーを開催しました。今回、福島県郡山市が二十一回目の開催地となりました。

セミナーには、福島県内から、二十四人が出席しました。

プレゼンテーション「広島での平和学習とその効果」

原爆によって壊滅的な被害を受け廃墟と化した広島が国際平和文化都市として復興を遂げる様子や平和記念公園での学習などを紹介しました。また、被爆体験講話、被爆体験記朗読会などのメニューや、広島への修学旅行の例を紹介しました。

プレゼンテーション風景

プレゼンテーション「広島での修学旅行」

広島平和記念資料館の入館者数による地域別の修学旅行の状況を紹介するとともに、福島県から広島への修学旅行のモデルコースの提案や、広島でできる体験学習を具体的に紹介しました。

被爆体験記朗読の実演等

新たな体験型平和学習プログラムとして、被爆体験記や原爆詩の朗読会の開催状況を映像で紹介するとともに、朗読ボランティアによる実演を行いました。

被爆体験記の朗読実演風景

参加者の声

参加者からは、「平和学習として広島はやはり取り上げていくべきだと改めて感じました。最近は楽しさを重視する部分もありますが、学習は外せないものです。」、「朗読を聞き、いろいろなことを考えることができました。ぜひ本校生徒にも体験してほしいと強く感じました。」などの意見が多く寄せられました。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

高校生による「原爆の絵」が完成

―被爆体験を絵に描く―

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、平成十九年度から、本財団被爆体験証言者とボランティアの生徒が共同し、証言者の記憶に残る被爆時の光景を描く「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

このたび、平成二十六年度から六人の証言者と七人の生徒が六グループに分かれて制作を進め、完成した七点の絵画が本財団に寄贈されました。

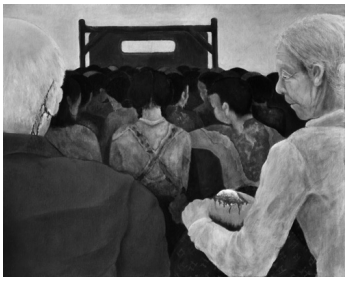
七月三日（金）に基町高等学校展示ギャラリーで行われた完成披露会には、証言者の笠岡貞江さん、國重昌弘さん、國分良徳さん、兒玉光雄さん、白石多美子さん、長尾ナツミさんと、絵を制作した七人の生徒を始めとする創造表現コースの生徒のほか、本財団及び基町高等学校の関係者が出席しました。

制作した生徒からは、「今回の経験から、原爆が投下された事実を改めて身近に感じた」「制作した作品が、戦争や原爆の愚かさ、非道さを伝えることができたら良いと思う。自分のできることで、原爆を伝えていくことが大切なことだと思う」「目をそらしたくても、それが現実であったことを知ってほしい」などの感想が寄せられました。

被爆後の広島の惨状を絵画で残す「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者が被爆体験講話で活用するなど、原爆被害の実相を後世に継承するために役立てていきます。

（平和記念資料館　啓発課）

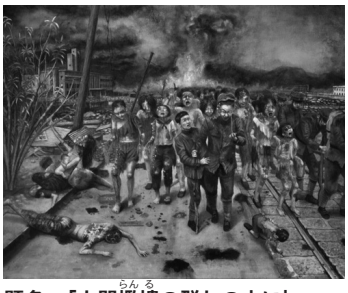
題名：「爆風で下敷きになり焼かれた軍人の骸骨（広島第一陸軍病院第一分院内）」
制作者：竹本 茜（基町高等学校普通科創造表現コース3年）
國分 良徳（被爆体験証言者）



題名：「重症者を運ぶトラック」
制作者：宇都宮 未来（基町高等学校普通科創造表現コース3年）
國重 昌弘（被爆体験証言者）

題名：「本当に、おとうさん?」
制作者：小川 美波（基町高等学校普通科創造表現コース2年）
笠岡 貞江（被爆体験証言者）

題名：「お母さん待って!」
制作者：山﨑 菜結（基町高等学校普通科創造表現コース3年）
白石 多美子（被爆体験証言者）



題名：「人間襤褸の群れの中に」
制作者：津村 果奈（基町高等学校普通科創造表現コース2年）
兒玉 光雄（被爆体験証言者）

題名：「被爆して避難した河原での出来事」
制作者：栩田 優希（基町高等学校普通科創造表現コース3年）
國分 良徳（被爆体験証言者）

題名：「後に生きる人たちへ」
制作者：一ノ間 照美（基町高等学校普通科創造表現コース3年）
長尾 ナツミ（被爆体験証言者）

「広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告」第十一号を発行しました

平和記念資料館資料調査研究会の調査研究活動の成果をとりまとめた「広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告」第十一号を七月十五日に発行しました。執筆者とテーマは次のとおりです。

《特別寄稿》

◆安藤福平（広島県立文書館　名誉館員）
広島平和記念資料館収蔵資料のドキュメンテーション―「平和データベース」をてがかりに―

《会員研究報告》

◆高橋博子（広島市立大学広島平和研究所　講師）
アメリカ核開発関連機密文書の公開状況―マンハッタン計画・米原子力委員会―

◆葉佐井博巳（広島大学名誉教授）
伝承者に期待

◆水本和実（広島市立大学広島平和研究所　副所長）
北朝鮮の3度目の核実験と停滞する核軍縮―2013年の核をめぐる動向と論調―

◆横山昭正（広島女学院大学名誉教授）
『市民が描いた原爆の絵』に刻まれた被爆者の最期の姿―その2―8月6日から11日まで―

広島市内の図書館でお読みいただくことができます。希望者には、先着順に五十部を無償配布します。着払いでの郵送も可能です。

【お問い合わせ】
平和記念資料館　学芸課
☎（082）241・4004

資料展「電車走る」を開催

平和記念資料館では、路面電車と広島の街の歩みを振り返る資料展を、平成二十七年七月二十八日から十月三十一日まで当館東館地下一階で開催しました。

今から約百年前、大正元年（一九一二年）に開業した路面電車は、戦前、街の発展の礎となり、戦後は復興のシンボルでもありました。被爆時には、全車両百二十三両の内、百八両が被害を受け、市内全路線が運行できなくなりました。しかし、三日後には、一部区間で運行を再開し、走り始めた電車は市民を元気づけたと伝えられています。

相生橋（あいおいばし）での復旧作業（昭和21年）
岸本吉太（きしもとよした）氏撮影／岸本坦（ひろし）氏提供

今回の資料展は、最新の路面電車の研究を踏まえて、被爆前の花電車や、被爆後の復興する街を背景に市民と電車を写した写真や、被爆電車の分布図など十五枚のパネルで構成しました。初公開の写真もあり、来場者からは、「被爆後にいち早く電車が走ったことを知りました」「電車はずっと広島市民に親しまれてきたのですね」等の感想が寄せられました。

この資料展は、好評のため、展示期間を当初の九月末より一か月延長しました。

（平和記念資料館　学芸課）

JICAサロン「余熱の会　南米チリ」

～シニア海外ボランティア経験者が語る派遣国の魅力～

九月二十七日、（独）国際協力機構（JICA）中国との共催で、JICAサロン「余熱の会　南米チリ」を、国際交流ラウンジにて開催しました。

初開催となる今回は、JICAシニア海外ボランティアとして二年間チリに滞在した経験を持つ佐藤哲夫（さとうてつお）さんを講師に迎え、派遣国チリの魅力や海外ボランティアの実際について、お話しいただきました。

熱心に聞き入る参加者の皆さん

チリの国内事情や、配属先での仕事、滞在中の生活、現地の人との交流、休暇で訪れたパタゴニアのことなど、写真や資料を使い、ときにユーモアを交えながら幅広く語っていただきました。また、武道や日本料理といった日本文化がチリでも人気があること、現地で日本語を学ぶ人たちとの出会いについてもお話しいただきました。参加者も、普段はなかなか聞くことができない貴重な体験談に熱心に耳を傾けていました。

続く質疑応答では、チリの生活や言葉の習得、海外ボランティア参加の心構えについてなど、参加者から多くの質問や意見が寄せられ、理解と関心が一層深まるひとときとなりました。

佐藤さんがチリから持ち帰った「余熱の風」は、再び熱い風となって参加者に届けられ、会は盛況の内に幕を閉じました。

（国際交流・協力課）

ネパール地震被災者救援市民募金の実施

今年四月二十五日、ネパールの首都カトマンズ付近を震源とするマグニチュード七・八の地震が発生し、約三万人に及ぶ死傷者や、多くの被災者を出しました。

広島市と本財団は、その被害の甚大さを考慮して、人道的見地から、募金活動を今年五月十五日から七月三十日まで実施しました。この呼びかけに対し、多数の市民、団体等から温かい募金が寄せられ、募金総額は百五十七万二千七百四十一円に達しました。お寄せいただいた募金は、被災者援助のため、八月十四日に、日本赤十字社及び被災したカトマンズ市（平和首長会議加盟都市）へ送金しました。

（国際交流・協力課）

広島市外国人市民の生活相談コーナーをご利用ください

～生活相談や通訳を行っています～

【連絡先】
☎（082）241・5010
E-mail：soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】
広島市中区中島町一番五号
広島国際会議場一階
国際交流ラウンジ内

【時間】
月曜日～金曜日
午前九時～午後四時

【対応言語】
中国語・英語・ポルトガル語・スペイン語・韓国朝鮮語　他

新スペイン語通訳相談員（中央）をよろしくお願いします

「姉妹・友好都市の日」記念イベント 姉妹・友好都市を市民に紹介

広島市は、海外に六つある姉妹・友好都市を市民のみなさんに身近に感じ、友好の持つ意味をより深く理解していただくため、都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けています。それを記念してイベントを開催しました。各イベントの司会・進行役は、公募により選ばれたヒロシマ・メッセンジャーが務めました。

ハノーバーの日

五月二十四日（日）、広島市留学生会館で「ハノーバーの日」記念イベントを開催しました。主催―「平成二十七年度ハノーバーの日実行委員会」（広島ハノーバー友好協会や本財団など十二団体で構成）

ハノーバーと交流の深い上田宗箇流茶道の体験、本場ドイツ製法のソーセージとドイツパンの試食、バウムクーヘンの試食、ルッチェラーゲ（二つのグラスに異なる酒等を注ぎ、一気に飲み干す。）を行いました。

またホールでは、セレモニーの後、ヒロシマ・メッセンジャーのステファン・バリンさんと宮前純子さん、ハノーバー出身のナルエス・サンティノさんが、ハノーバーの街の様子や花火大会などのイベントを写真を交えて紹介しました。その後、「ドイツ音楽コンサート」では、三組のプロの音楽家が、ドイツにゆかりのある音楽を中心に素晴らしい演奏を披露しました。最後に来場者全員で「野ばら」を合唱し、会場が一体となって終了しました。

このほか、ドイツ・ハノーバーの紹介展示では、ハノーバーからやってきた七人乗り自転車「カンファレンスバイク」の展示や、広島市とハノーバー市の交流の歴史に関するパネル展示、ハノーバー電車のペーパークラフト体験、ドイツ絵本の紹介・読み聞かせを行い、各コーナーとも大好評でした。

約三百人の来場者があり、多彩なプログラムを通し、楽しくハノーバーやドイツへの理解を深めていました。

記念コンサートの様子

モントリオールの日

七月十二日（日）、百貨店の福屋広島駅前店六階マルチの広場で、記念イベントを開催しました。主催―平成二十七年度モントリオールの日実行委員会

まず来場者は、カナダ産の氷河水、メープルウォーター、メープルクッキーのウェルカムドリンクを楽しみながら、昨年国際親善交流のためモントリオール市を訪れた「広島車いすダンスくらぶ」による、車いすダンスを観賞しました。

セレモニーの後、ヒロシマ・メッセンジャーのガリエピ・ジャンベルナールさんと川本美帆さんが、モントリオール市のスポーツ、食、歴史などにまつわる、来場者参加型のクイズを行いました。

記念パフォーマンスでは、カナダ出身で関西在住の大道芸人ガロウェイ・リッキーさんが大迫力のパフォーマンスを行いました。リッキーさんの陽気な性格と流暢な日本語、緊張感あふれるパフォーマンスに会場全体が引き込まれ、たくさんの笑いと拍手が響きました。

イベントの最後には、メープルシロップなどの特産品が当たるお楽しみ抽選会を行いました。

この他、カナダ特産品の展示・販売や、カナダの子どもたちが制作したキルトの展示などを行いました。

約四百五十人の来場者は、食や芸術文化を楽しみながらモントリオールやカナダへの理解を深めていました。

（国際交流・協力課）

記念パフォーマンスの様子

ひろしま奨学金 決定書交付式

本財団では、ひろしま奨学金事業として、広島市域内の私費外国人留学生三十人に対して、月額三万円の奨学金を一年間という期間を定めて支給しています。

今年度も、広島市内の九大学で学ぶ三十人（三か国）の留学生を「ひろしま奨学金奨学生」に決定し、七月九日（木）、広島国際会議場三階研修室において決定書交付式を行いました。式には、来賓として「ひろしま留学生基金」へ多額のご寄付をいただいた二団体の代表の方にご参加いただきました。さらに、奨学生が常日頃からお世話になっている大学関係者（十大学十人）にご出席いただきました。

式後は、来賓の方々や大学関係者の方々との交流会を開催し、奨学生が自己紹介と、広島の印象や将来の希望、奨学生決定の感謝の気持ちなどをスピーチしました。

市民の皆様方には、今後とも、私費留学生が経済的問題に影響されることなく、安心して学業に専念し、広島市との国際交流の架け橋になれるよう、引き続き「ひろしま留学生基金」へ温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

【ひろしま留学生基金へのお問合せ】
広島平和文化センター国際部　国際交流・協力課
☎（082）242・8879

奨学生決定書交付式での記念撮影

平和について思う

被爆70年：2015年NPT再検討会議
―市民の取組と今後の展望―

広島県生活協同組合連合会
専務理事　高田　公喜

プロフィール
〔たかだ　こうき〕
1958年6月28日広島県生まれ。
1980年生協ひろしま入協、共同購入事業部長、経営企画室長、福祉事業部長などを歴任、2006年から日本生協連福祉事業推進部部長として出向し、広島帰任後、生協ひろしま常務理事を経て2013年より現職。

二〇一〇年のNPT再検討会議に引き続き、生協代表団（九十一名）の副団長として日本被団協代表団（四十九名）と共に総勢百四十名で二〇一五年NPT再検討会議に参加しました。私たち生協代表団は、被爆者の皆さんの現地活動をサポートしながら、被爆の実相を広める取り組みと合わせて、主要各国政府への要請行動や、全国から集めた「核兵器禁止条約の交渉開始を求める署名」の国連代表部への提出を行いました。また、帰国後に現地の様子や感じたことなどを報告し、草の根的世論形成をしていくことを目的に掲げて渡航しました。

ニューヨークにおいて四月二十六日、NGOの共同行動やデモ行進に参加後、ダグ・ハマーショルド広場で、核兵器禁止条約を求めて平和首長会議と原水爆禁止日本協議会がそれぞれ集めた署名をタウス・フェルーキNPT再検討会議議長に手渡しました。全国の生協は、広島市が提唱する平和首長会議の取り組みに賛同し、市民による世論形成を喚起するものとして取り組みを進めました。松井広島市長から、これまで取り組んできた「核兵器禁止条約の早期交渉を求める署名」（百九万七千五十九人分、うち約八十九万筆が生協集約分）が手渡された時、私は、「まさに市民の取り組みが国連に届いた瞬間だ」と思いました。

横断幕を持ち行進する日本被団協代表団と生協代表団

今回のNPT再検討会議では、ニューヨーク訪問に至る経緯でこれまでにない進展がありました。それは、平和首長会議とのコラボレーションの実現でした。昨年から広島市、広島平和文化センターとの打ち合わせを重ね、日本生協連代表団として正式に、ニューヨークで平和首長会議が主催する集会への参加を実現できました。具体的には、四月二十七日、岸田外務大臣も参加された「ヒロシマ・ナガサキアピール集会」に十名の生協代表団が出席し、スピーチを行いました。戦後一貫して、生協は市民の立場から平和活動を重点の一つとして取り組んできましたが、おそらくNPT再検討会議の関連行事でのスピーチは初めてであったと思います。その集会において、核兵器の廃絶を国家間対立を盾に議論を先延ばしにするのではなく、法的禁止（核兵器禁止条約の締結）にむけて、以下の三つがアピール声明として参加者によって採択されました。

①核保有国の首長は、被爆地を訪問すること
②今後の核軍縮交渉では、核兵器の非人道性について理解すること
③NPT第六条にのっとり、誠実に交渉を開始すること

この三つのアピール声明は広島県生協連も賛同しています。

今回の再検討会議の結果は、皆さんもご存知の通り、核保有国と非核保有国の対立が平行線をたどり決裂しました。しかし、核兵器の非人道性に関わる世界各国の潮流は大きく変化し、被爆者の皆さんの活動が多くの市民の声に反映されて広がっているのです。私たちは、世界が抱える諸問題を理解した上で、国連や核保有国、非核保有国代表との対話（ロビー活動）も平行して行いました。どの国の代表にも真摯に接して頂きました。しかし、核兵器の非人道性は、国を超えた人類共存のための価値観としての立ち位置には未だなりえていないという実感もしました。

帰国後の六月五日（金）、広島市内において、市民六団体（広島県生協連、広島県被団協、YMCA広島など）で構成する実行委員会主催の〝二〇一五「戦争も核兵器もない平和な世界を」市民の集い〟を開催しました。五回目となる今年は、湯崎広島県知事、松井広島市長をはじめ、広島県内八市七町の首長や職員の皆さん、広島平和文化センター、友誼団体、全国から参加した生協の組合員や役職員、合計二百二十四人が参加しました。参加者は過去最高の人数でした。

この集会を通じて、日本を含め、世界のリーダーたちは、「被爆の実相に向き合い、今こそリーダーとしての使命を果たすべき」であり、私たち市民は、「思想信条を乗り超えて連帯し、核保有国やその同盟国に大きなインパクトを与えるためにも、オールヒロシマ・オールジャパンで平和の活動を推進していくことが大切である」と、あらためて思いました。

世界では、新たなる紛争に伴い核兵器の使用リスクが高まっています。抑止力という考え方は、歴史的に見ても長く続く考え方ではありません。むしろ、欧米を中心とした世界のパワーバランスが損なわれる可能性が高くなってきている情勢の中で、核兵器を持っている国は相互確証破壊（MAD）を誘発し、人類存亡の危機をまねく恐れが高くなっていると思いま

す。さらに、核そのもののリスク管理も必要となります。

そうならないために、私たちは、非人道的破壊兵器である核兵器を直ちに無くす努力を求めていかなければなりません。

私たちが取り組まなければならないことは、被爆者の想いを伝承・継承し、戦争も核兵器もない平和な社会を目指して、多くの市民の参加するネットワークを構築し、そのネットワークを通して世界に発信できるように世論を高めていくことです。

（二〇一五年十月二十三日寄稿）

海外からの来訪者が発信するメッセージ

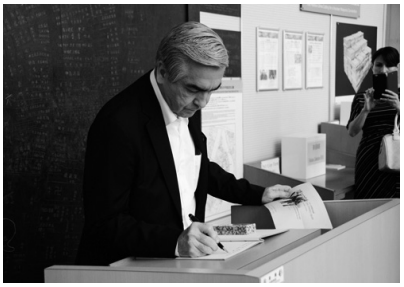
―広島平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に翻訳したものを掲載しています―

權泳臻（クォンヨンジン）／韓国・大邱（テグ）広域市長

広島よ！
平和の星として復活せよ！

（二〇一五年五月四日）

カルロス・アルマーダ／駐日メキシコ大使



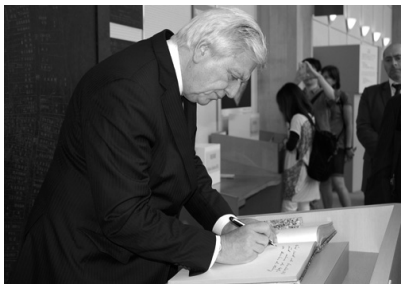
メキシコは常に断言している。「次なるヒロシマを回避するために人類は団結せねばならない。」我々は声を大にしてきっぱりと繰り返す。「いかなる状況の下であれ、かくも恐ろしい悲劇の再発があってはならない。」

（二〇一五年六月二十五日）

ヴォルカー・ブフィエ／ドイツ連邦参議院議長兼ヘッセン州首相

私たちは深い感銘を受け、広島が蒙（こうむ）った犠牲を平和への戒めとします。

（二〇一五年七月四日）



モニカ・グリュッタース／ドイツ連邦首相府文化メディア担当国務大臣

戦争による犠牲者と破壊を回顧するとき、我々は将来に対する絶え間ない責任を感じる。このようなことは二度と繰り返されてはならない。

印象深い慰霊碑をもつ広島のような場所は、世界の平和と自由を守るため、常にまた幾度でも行動するよう我々に警告するものである。

（二〇一五年七月十日）

アンドレイ・コソラポフ／ロシア連邦・ボルゴグラード市長

過去の悲惨な過ちを繰り返さないように、現世代と次世代には、大量破壊兵器によってもたらされる恐怖を認識する義務がある。

（二〇一五年八月五日）

【書籍の紹介】

軍縮辞典

日本軍縮学会 編

軍縮に特化した辞典としては日本で始めての「軍縮辞典」が刊行されました。

軍縮に関する基本概念について正確な情報を広め、議論に共通の基盤を提供することを目的としています。

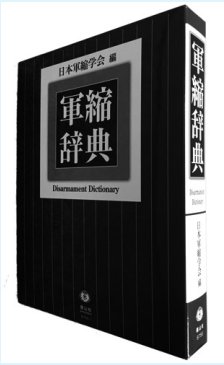
著者
日本軍縮学会　編（編纂委員会委員長　黒澤満（くろさわみつる）（大阪女学院大学大学院教授／大阪大学名誉教授）
執筆者　百二十四名

出版年月日
二〇一五年十月五日

ページ数
五百六十ページ

定価
五千円（税別）

【お問い合わせ】
信山社出版株式会社（しんざんしゃ）
〒113－0033
東京都文京区本郷六－二－九－一〇二
☎(03)3818－1019



〝ヒロシマの心〟を発信する人々

「平和の鐘」響け 再び実行委員会

平和記念式典は、「平和祭」として被爆二年後の昭和二十二年（一九四七年）から始まり、昭和二十五年の中断をはさんで、毎年行われてきました。式典で鳴らされる「平和の鐘」は現在のもので五代目ですが、歴代の鐘の中で、原爆の焼け跡の金属が鋳込まれた現存する最古の鐘があります。昭和二十四年、広島銅合金鋳造会（以下、鋳造会という）が広島市に寄贈し、広島市中央公園に設置されている二代目の平和の鐘です。被爆から七十年の今年、昭和二十四年の平和祭で一度使われたきりになっているこの鐘を、再び原爆の日に鳴らそうという記念式が「『平和の鐘』響け再び実行委員会」により開催されました。代表の高東博視さんにお話を伺いました。

活動のきっかけは

「父たちが造った鐘をもう一度鳴らして欲しい！」昨年の秋、鋳物師の遺族の願いを、私の近隣の篤志家を通して初めて耳にしたのです。早速、平和の鐘の由緒を調べてみると二代目の鐘は、広島市民にとって非常に重要なものであるにもかかわらず、市民はもちろん所有者である広島市からも一時期忘れられた存在だったことを知り、鐘が日の目を見るようにしないといけないと強く感じました。また、この鐘は昭和二十四年の広島平和記念都市建設法制定を記念して広島市に寄贈された経緯があるのですが、私は広島市役所に在職中、この法律の事務を担当したことがあります。また、旧広島市民球場に勤めていた頃には、鐘の由緒など良く知らずに、球場裏手の鐘のそばを散策していたことを想い出し、何かの縁を強く感じました。

二代目の平和の鐘とは

鐘について調べる中で、昭和四十九年七月二十四日の中国新聞夕刊の記事を発見しました。当時、鋳造会会長だった松村米吉さんのインタビュー記事です。〝昭和二十四年、戦後すぐの貧乏な時代、みなが私財を投じ、時間と労力を注ぎ込んで、やっと造って広島市に寄贈した鐘。当時の浜井信三市長の要望で洋式の鐘とし、原爆の焼け跡から集めた金属を鋳込んだ。平和祭で鳴らされたときは、これで霊が慰められると涙がこぼれ、もう死んでもいいとさえ思った。しかし、一度の式典で鳴らされただけで、ほったらかしになっている。寂しいことだ。〟そんなことが記事には書かれています。

私はこの記事に心を強く動かされ、この鐘が日の目をみるよう行動しようと決心しました。

「平和の鐘、爆心地へ」
金銀朱塗りのクラをのせた牛7頭、馬3頭に引かれて運ばれる二代目の平和の鐘。
（中国新聞社出版「被爆50年写真集 ヒロシマの記録」より）

実行委員会の立ち上げ

今年の二月はじめ、私は集めた資料を市役所に持ち込み、被爆七十周年記念事業として二代目の平和の鐘を平和記念式典に活用して欲しいと要望しました。しかし、その時すでに記念事業の中身は固まっていました。そこで、市民の手（市民組織）で鐘の響きを復活させてはどうか、と逆に提案を受け、その方向で進めることにしました。

様々な市民組織の形を考えましたが、昭和二十四年当時の鋳造会の遺族を中心に団体を作るのが良いだろうと考え、遺族を探し始めました。しかし、鋳造会は半世紀以上も前に解散し、当時の名簿さえ全く無い状態ですから、五月時点で当時の鋳造会十三社中六社の遺族しか見つかりませんでした。

記念式の準備期間も十分なく、実務的な実行委員会を立ち上げ、判明した限りの遺族を招待して鐘を鳴らすことにしました。広島の街づくりボランティア仲間有志に賛同してもらったので、急いで規約を作成して六月に実行委員会を立ち上げ、私が代表を務めることになりました。

調査の過程での発見と出会い

松村米吉さんの遺族である松村伸吉さんとお会いすることが出来、この方が貴重な当時の写真や新聞記事を保存しておられ、これが遺族探しの大きな力になりました。調査を続ける中で、鐘の完成時の記念写真に写っている方、二人に実際にお会いすることが出来ました。ご高齢ですが、思い出深く当時のことを話していただきました。また、古い町村誌や古老の話などを頼りに鐘が鋳造された場所を突き止めたときは感激しました。現在は工場の跡形もありません。昔の新聞記事等を頼りに調査を続ける最中、地元新聞社の関心をひき、記事として取り上げてもらいました。この記事を読んだ遺族から連絡があり、新たに貴重な資料の発見へと繋がったこともありました。

「平和の鐘」響け再び記念式

八月六日の記念式には、実際に鋳造に携わった方のお一人も、ご高齢を押して参加してくださいました。鋳造会や浜井市長のご遺族ほか広島合唱同好会など百人余の方々に参加いただき、六十六年ぶりに鐘を打ち鳴らし、全員が感動に浸りました。

実際に鐘を鳴らしてみると、洋式の鐘なので、寺の梵鐘のような長い余韻のある響きではありませんでしたが、多くの仲間を原爆で亡くした製作者たちの無念と平和を願う心の響きと受け止めました。また、鐘に焼け跡の金属が鋳込まれていることを知っているためか、原爆で亡くなった人々の叫びのようにも感じられました。

これからの活動は

「これからも毎年八月六日に式典を続けていこう」が実行委員会の総意です。まず今回の記念式の報告書をまとめ、それから今後の鐘の活用案を考えていきます。四年後の広島平和記念都市建設法制定七十周年の記念行事での活用や「平和の鐘・絵本」つくり等の案も出ています。

また、今回の調査で集めた貴重な資料を残し伝えるためにも、二代目の鐘を中心に、広島にたくさんある「平和の鐘」を整理して一冊の本にまとめておきたいと考えています。何年かかるかわかりませんが、鐘の製作者の方々の熱い想いを胸に頑張ってゆきたいと思います。

どうもありがとうございました。

（平成二十七年十月十五日取材）

再生紙を使用しています